

平成 19年 12月

原 明史 学位論文審査要旨

主 査 池 口 正 英
副主査 汐 田 剛 史
同 村 脇 義 和

主論文

Expression of Fhit, Mlh1, p16^{INK4A} and E-cadherin in early gastric neoplasia:
Correlation with histological grade and gastric phenotype

(早期胃腫瘍におけるFhit、Mlh1、p16^{INK4A}、E-cadherinの発現：組織学的程度と胃型形質との関連)

(著者：原明史、八島一夫、八杉晶子、香田正晴、河口剛一郎、原田賢一、安達裕宣、
汐田剛史、井藤久雄、村脇義和)

平成19年9月 Oncology Reports 18巻 553頁～559頁

審査結果の要旨

本研究は内視鏡的粘膜切除術により得られた胃腫瘍を用いて、免疫組織化学染色を行い、DNAメチル化により影響を受ける4つの癌抑制遺伝子（*FHIT*、*MLH1*、*p16^{INK4A}*、*E-cadherin*）の蛋白発現と組織悪性度との関連を検討するとともに、胃型形質発現との関係についても検討したものである。その結果、粘膜内癌においてこれら癌抑制遺伝子蛋白発現の減弱または消失が認められた。また胃型形質発現については胃型においてこれら癌抑制遺伝子蛋白発現異常数が高値であることが判明した。本論文の内容は、胃癌発生の早期段階において癌関連遺伝子のDNAメチル化やその蛋白発現異常の蓄積が重要であることを明らかにし、さらに胃型形質発現を組み合わせて解析することが胃腫瘍の悪性度評価に有用であることを示唆したものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。